池田高校 SSH 卒業生アンケート
高校１５期生（SSH１期生）　Ａさん

(聞き手　副校長山﨑)

1　まず、あなたは今どのようなお仕事(生活)をされていますか。仕事の場合は、よろしければお立場もお教えください。

医師・病院経営・医療研究者

2　高校時代とはどういう研究をされましたか。

採択直後の熱気ある時期だった。原田先生とともにアリの研究を始めた。ラムサール条約に指定された伊牟田池をはじめ各地で、アリのサンプリングをしたりして、実証的な研究を進めていた。3 年 10 月には、インドの国際学会(パンジャビ大学)で、その後の人生にも影響を与える大きな刺激を受けた。受験の大事な時期だったけれど、二度と経験できないことだったので、それを選んだ。

3　研究活動の上で、最も印象深かったことは何ですか。

世界の研究者と英語という共通言語で、研究成果についてディスカッションするという経験は、身体全体からわくわくするものがあった。多くの国際学会には行ったが、それを超える経験は未だ嘗てない。私は医師として、アメリカの国際免許も取得したが、その原体験がなければ、世界を目指さそうとはしなかった。

4　そこで学んだことはどういうことだと考えますか。

丁寧・緻密にデータを集めて、またたくさんのデータを丁寧・緻密に考察するという、いわば「科学の営み」を繰り返し経験したことで、「よく見せよう」という安易な考えは払拭された。先生からも、「知ったかぶりではいけない」と「地道さや細かさが大切だ」と薫陶を受けた。今でも、医師としてのスタンスは、知らないことは知らないという姿勢を貫いている。

5　SSH の学びにより、科学的な感性や好奇心、思考力は伸びたと思われますか。

科学的な視野や刺激は、今もフレッシュに残っていて、実は医学ではなく理学を志そうとも考えた。ただ、医師を志しつつ、科学もしていこうと決めた。自分がこれまで臨床と研究を一緒にやろうと努力できたのは、高校時代のこの基礎研究がある。SSH の学びは、そういう意味で自分の生き方や人生の選択を変えたと考えている。

例えば遠心機をまわすことですら、他の高校生よりも先んじるような優越感でわくわくしていた。そうした好奇心の高い高校生が集まる大会は、他の高校生が自分では考えられない視点で研究を進めていて、大変刺激的で、そして切磋琢磨していた。当時、全国大会で競った県外の高校生とは、今でも付き合いが続いている。科学を介在したこうした同世代との出会いも、お互いの科学的な感覚を鋭くしてくれたと思っている。

6　プレゼンテーションやわかりやすく話す力や表現力は付いたと思いますか。

県大会、九州大会、全国大会、国際大会という一通りの発表をして、抑揚やアクセント等の伝え方が身についた。当然論理的・科学的な考え方はその時に身についたものである。医学部では、あまり基礎研究とそれを踏まえたプレゼンはやらないので、高校時代に身についた表現力は、その後の自分を支えてくれたと考えている。臨床の現場にいて、患者への伝え方にも役立っている。

7　高校時代が普通の教科学習だけで終わったとしたら，どう違ったと思いますか。

また、もし SSH の学びが私たちの後輩たちから始まったとしたら、強烈な羨望が沸いていたと思う。そして、それができないことで、ひねくれていたかもしれない。教科学習だけであったら、前に述べた知的刺激は得られず、高校時代は中途半端なものになったと思う。

8　SSH の学びは、あなたの理系選択に影響しましたか。また、研究したことで学習意欲は高くなったと思いますか。

まず、医学部に入るためのモチベーションは、高校時代のアリの研究で得ていたので、それがないと、合格に向けて頑張っていたかもおぼつかない。とにかく、当時は大学で研究と臨床を一緒にやろうと燃えていた。今も、医師として学ぶ姿勢があるとすれば、そこから来ている。

9　現在どのような生活を送っていますか。研究(仕事)はどんな様子ですか。

今の自分に役立っているところはどんなところと考えますか。

科学的な考え方や手続き、表現力は、今の仕事を支えてくれている。

後一つ、患者さんの心を開くことは私たちにとっても大切な仕事だが、患者さんには刺さることば、例えば「私は昔はアリの研究もしていたんです」と言うこと。そうすると、自分がどんな人間かを考えてくれて、患者さんがぐっと親しみを持ってくれる。私は、その時ただの医者ではなくなる。いろんな国の医師に出会うときも、その経験をいうと、サイエンス的なアクティビティの雰囲気が高まり、一気に距離が近くになる。そういうところにも役立っている。

１０　今後の池田高校のＳＳＨについてどう考えますか。期待することなどを教えてほしい。

今の日本に元気がなく、周囲の東南アジアの方が活気があるという気がする。日本は深刻な少子化の中にあるが、その数少ない子どもたちに科学の面白さを味わわせて、課題を科学によって克服する能力を身に付けてもらいたい。私には 5 歳の子どももいるが、東京にいると、幼いころから誰もが受検一辺倒で知識の詰め込みを鼓舞される。知識習得は当たり前であるが、もっと柔軟な発想を育てないと、次世代は大変なことになると思う。

東京の SSH 校も多いけれども、子どもを行かせたいとそうそう思わない。池田の校風があって、その上で SSH の学びがあればこそ、素晴らしい教育ができた。同窓生とそういう話になる。生徒も教師も、もっと頑張ってほしい。私にできることがあれば、いつでもお手伝いしたい。